

2021/4/7

(うとQ世話し 絶好の機会)

「甚大な被害」

というのは、気の緩みきったときに起きる場合が多いようです。

ですが、この場合の「気の緩み切った」というのは、何も規律が緩んで「だらけきった」という意味とは違う気がします。

どういう気がするのかと言えば

「想像だに、しなかった」「思いもよらなかった」「全くの想定外だった」という意味での「気にも留めていなかった」に近いかもしれません。

なので、甚大なる被害を少しでも軽減するためには、まずは「気に留めて」「想定内にしておく」必要があります。少なくとも「アイテムとして認識しておく必要」です。

そのためには、可能な限りあらゆる事態を想定する「想像力」が必要になります。

その想像力を広げるに当たって「歴史の探索」というのは大きな力になりそうです。

「温故知新」

という言葉があります。中学で習いました。

この意味する処は、古(いにしえ)を温ね(たずね)、新しきを知る、ですが、思うに、之は両論併記の並立の位置づけではなく、因果関係に基づく順番の位置づけではないかな、と。つまり、古(いにしえ)を温ねてみないと、本当に新しいものはみつからない、と解釈するのが妥当なのではないかと言うことです。

詰まり旧弊と新規の対立概念、又は白黒判定の選別排斥概念ではなく、前後の連続概念、白もあつたし黒もあつたという包含概念として見直す必要があるのではないのか?という事です。

それを後者ではなく前者で捉える弊害(前の全否定)としては、折角古人が見つけた有用な手がかりを、毎回リセットしてしまうものですから、それが連続的に素直に積み上がり、それこそ毎回一から始め直す時間の無駄、手順の無駄が発生することが考えられます。

(全否定を無駄と考えるのは、物事に完全や100%はないと、考えるからです)

もし素直に耳にし、紐解いていけば、人類はもっと先に進めていたのかもしれない。

その伝に従って、もう少し枠を広げてみると、唐突に発生した様に思える出来事でも、それらの歴史を参考にして「より大きなメカニズムの視点」にたつて見る事が出来ていけば、案外あっさり「予知、予見」出来ていたりするような気がします。

例えば、その時の栄耀栄華を極めた高位層の中で腐敗が常態化すると、その後必ず疫病の蔓延が始まるというのは歴史を紐解けば幾つも見つかるパターンです。

また、少し喩え方を外しているかもしれませんが、川の流れが急峻であるときには、勢い余って片側の岸を削りとり、その土石は反対の岸に積もって、川の流れが蛇行するという様に、その時の勢いがありすぎるものが、その度を過ぎると、却って右へ左への蛇行、即ち混乱を引き起こすこともありそうです。

歴史や自然界は我々にいろいろなことを教えてくれたり、ヒントを授けてくれたりします。今一度、この第四波において、冷静になって我が身、我が生活を振り返ってみるには、絶好の機会かもしれません。